

## 小説『牛鍋』を読む

● 山 崎 一 穎

鷗外には『牛鍋』（明治43年1月の小料理屋で牛鍋をつつく風景を描写している。男と女と女の娘が

演ずるドラマは、ほとんど無言で展開するが、所作が心理ドラマを生み出す。

黒縹子の半衿の掛かった縞の綿入れに、余所行きの前掛をした女、その娘で七つか八つの子、死んだ亭主の友人で、苦味走った印半纏を着た三十前後の男が牛鍋を囲んでいる。男は「酒を飲んででは肉を反す。肉を反しては酒を飲」んでいる。女は「永遠に渴し」た目で男の顔を見ている。女の子が牛鍋に箸を伸ばそうとすると、男が「待ちねえ。そりやあまだ煮えてゐねえ」と言う。しかし、男は舌の根も乾かぬうちに女の子が箸で挟まうとした肉を自分の口へ運ぶ。女の子は驚きの目で男を見ている。

女の子が箸を出すたびに「そりやあ煮えてゐねえ」を繰り返す。そして男はすばやく肉を口へ運ぶ。娘は箸を鍋から引かなくなった。小説の語り手は「男のすばしこい箸が一層すばしこくなる。代りの生を鍋に運ぶ。運んでは反す。反しては食ふ。(中略)娘も黙つて箸を動かす。……大きな肉の切れは得られないでも、小さい切れ

は得られる」と記す。娘の母親について「永遠に渴してゐる目には、四本の箸の悲しい競争を見る程の余裕がなかつた」ばかりでなく、箸は動かずじまいだったと記されている。

語り手は浅草公園の母猿と子猿との芋をめぐっての争奪を記す。芋は大抵母猿の手に落ちるが、たまさか五つに一つは子猿の口に入る。母猿はそうなっても子猿を窘めない。

このエピソードを記した後、「箸のすばしこい本能の人は娘の親ではない。親でないのに、たまさか箸の運動に娘が成功しても叱りはしない。人は猿よりも進化してゐる」と記す。そして、永遠に渴してゐる目を苦味走った男に注ぐ女に対して、「一の本能は他の本能を犠牲にする。こんな事は獣にもあらう。併し獣よりは人に多いやうである。人は猿より進化してゐる」と記して小説は終る。

四〇〇字詰で五枚程のこの小説に人間ドラマが見事に描かれている。三人の登場人物には会話がない。男が「待ちねえ。そりやまだ

煮えてゐねえ」／「そりやあ煮えてゐねえ」と発する言葉のみである。

女が死んだ亭主の友達である苦味走った印半纏の男を見詰める一途なまなざし。牛鍋を前に男と女の娘とは悲しい箸の闘争を繰り広げる。娘の最初の驚嘆の目、逡巡する箸は、やがて食べるという本

能が箸を鍋から引かなくなる。女は食欲にも娘にも無関心である。男に向けられた渴いた女の心、ドラマは牛鍋を前に展開する。多情多感で饒舌という贅肉を削ぎ落した見事な人間模様が結実している。沈黙の心理闘争である。

——二〇〇七・二・一——